浮世絵館だより

藤沢市
藤澤浮世絵館

2023 年
5 月
WEB 版

みわたす絶景　名所絵 × 鳥瞰図の魅力

2023年　4月29日（土/祝）-7月2日（日）

藤沢市が所蔵する郷土資料は浮世絵以外にも様々あり、今回展示する吉田初三郎（1884-1955）の鳥瞰図もその一つです。大正から昭和にかけて活躍した初三郎は、全国各地の観光案内図を制作した人物として知られています。「大正の広重」と呼ばれるほどの実力を持った初三郎とはどのような人物だったのでしょうか。

見ているだけで楽しい 初三郎式鳥瞰図の数々

「鳥瞰図（ちょうかんず）」という言葉をご存知でしょうか。鳥瞰図とは、まるで鳥の目線のように上から見下ろす視点で描かれた図のことで、観光案内図や風景画によく見られます。日本の美術表現では、元々、俯瞰構図を用いて上空から見下ろすかのように描いた作品は多く、特に「洛中洛外図」などの都市景観を描いた作品によく見られます。浮世絵では、十九世紀に名所絵が浮世絵の一主題として成立し、鳥瞰図的な構図を用いた図は「一覧図（いちらんず）」と呼ばれました。

明治以降になると、鳥瞰図は専門の絵師による「観光案内図」へと受け継がれます。大正から昭和にかけて鉄道路線や航路などの交通が発達すると観光が大衆の生活に浸透したことで、日本各地で旅行ブームが起こり、観光案内図の需要が高まりました。その中で、鳥瞰図を使った観光案内図の先駆であり、鳥瞰図界をけん引したのが、吉田初三郎（よしだはつさぶろう）です。弟子たちとともに制作した日本各地の観光案内図は「初三郎式鳥瞰図」と呼ばれ、日本各地の都市や新たに広めたい名所を手がけ、およそ二千点以上もの鳥瞰図を描きました。吉田初三郎の鳥瞰図は、浮世絵における一覧図の系譜に連なる要素も含みますが、加えてグラフィック・デザインのような新たな要素も見出せます。

▲吉田初三郎「神奈川県観光図絵（部分図）」昭和 8 年（1933）

「神奈川県観光図会」

神奈川県全域を捉えた鳥瞰図で、神奈川県観光連合会の依頼により、県内の観光地を PR する目的で制作されています。江の島や鎌倉、箱根や大山など今も観光地として知られるスポットが細かく描かれています。

「神奈川県観光図絵」の表紙部分

歌川広重「東海道五拾三次之内 神奈川 台之景」
天保 4-5 年（1833-34）頃
メトロポリタン美術館所蔵

表紙に描かれた女性の背景には、歌川広重の「東海道五拾三次之内 神奈川 台之景」を意識した図が描かれています。自身が「大正の広重」と呼ばれていたことを意識したのでしょうか。このように、初三郎式鳥瞰図の表紙には、浮世絵や大和絵を彷彿とさせるような日本美術の要素を取り入れて描いたものが数多くあります。

洋画家志望の青年が商業美術家を目指したきっかけ

明治十七年（一八八四）、京都に生まれた初三郎は、幼い頃から絵を好み、友禅図案の絵師の家で丁稚奉公をしていました。明治四十年（一九〇七）に単身上京し、当時最先端の洋画を学べる白馬会で洋画の手ほどきを受けます。その後、京都に戻り、洋画界の重鎮である鹿子木猛郎（一八七四－一九四一）門下として制作に打ち込みました。洋画家を目指していた初三郎でしたが、西洋で商業美術が興隆している様子を目の当たりにした鹿子木から、商業美術家への転身を勧められます。当初は看板絵などを制作していましたが、京阪電鉄からの依頼で制作した鳥瞰図による案内図「京阪電車御案内」（一九一三）が当時の皇太子（後の昭和天皇）の目に留まり、「きれいでわかりやすい」と称賛されたことから、本格的に商業美術家として生きていく道を選びます。

初三郎式鳥瞰図、ココに注目

初三郎式鳥瞰図の特徴は大胆にデフォルメされた構図にあります。構図の中で最も見せたい場所を中心に据え、周囲を極端に歪曲させた地形は、見やすく観光案内図の実用性をもたらす一方で、現実世界ではありえないほど遠くまでを見渡した視点で描かれています。例えば、多くの作品に共通してあげられる特徴として、全国どこからでも富士山が見え、本来なら見えるはずのない海外までも描き込まれています。それでも、初三郎式鳥瞰図がその土地の名所や地形の位置関係が把握できるだけでなく、地図情報として破綻しなかったのは、初三郎自身が現地写生や取材を行い、現地の「リアル」を徹底的に調べたことにありました。現実と想像が混在しながらも、観光案内図として機能する不思議な魅力を持つ初三郎式鳥瞰図は、鑑賞者の旅行意欲を掻き立て、人気を博したのでした。

▲吉田初三郎「小田原急行鉄道沿線名所案内」昭和２年（1927）

拡大してみると・・・・

緻密に描き込まれた情報▶
見せたい対象（小田原急行鉄道：現在の小田急電鉄）を中心に据え、周囲をぎゅっと圧縮させています。

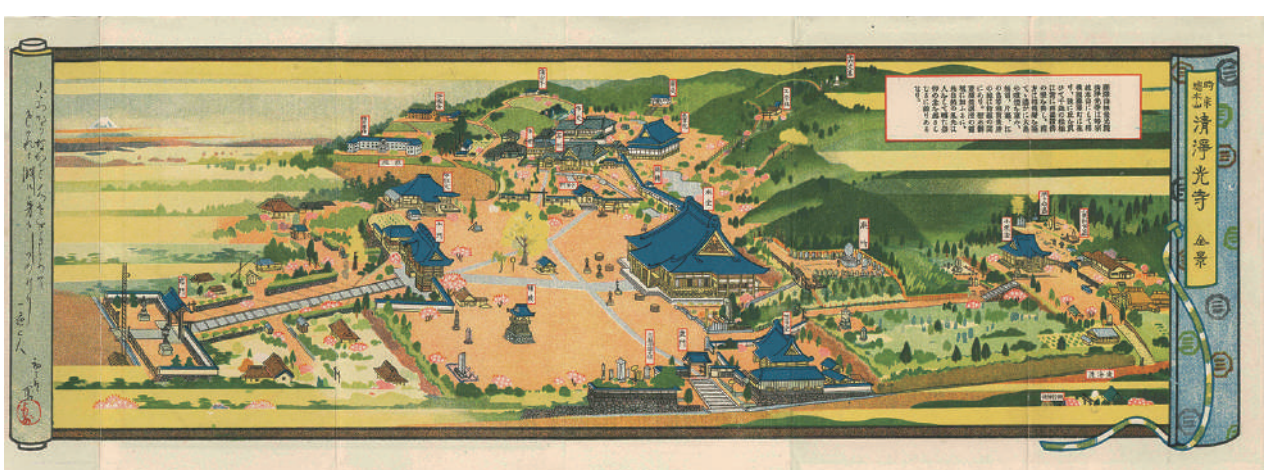
実物をぜひ
藤澤浮世絵館で
ご覧ください。

▲海外までもを見渡す
遠景の海上に台湾と上海が記されています。
他の作品では、「ハワイ」「サンフランシスコ」といったさらに遠くの地域が記されているものもあります。

駆け出し絵師時代の作品

時宗総本山清浄光寺（遊行寺）の境内を描いた鳥瞰図です。藤沢を象徴する寺院として浮世絵にもよく描かれました。本作は、初三郎作品の中ではかなり初期に制作されたもので、筆致にはまだ固さがあり、初三郎らしい伸びやかな表現には至っていません。資料の形状から、まるで絵巻物を広げるようにページが折られており、横長の構図と絵巻物の特性を活かした鳥瞰図です。

▼「時宗総本山清浄光寺全景」の表紙
一遍上人の伝承を彷彿とさせる大和絵風のタッチで描かれています。



▲吉田初三郎「時宗総本山清浄光寺全景」大正５年（1916）

藤沢市藤澤浮世絵館展示「みわたす絶景 名所絵×鳥瞰図の魅力」の開催に際して、吉田初三郎研究家の益田啓一郎氏からご寄稿いただきました。

「印刷技術の進化と吉田初三郎」
益田啓一郎（吉田初三郎研究家・アーキビスト）

生涯に約二千点の名所図絵（鳥瞰図）を描いた「大正の広重」吉田初三郎は、友禅図案師見習いを経て西洋画を学び、広告図案・名所図絵の世界へ進みました。

大正初期の初三郎作品はアール・ヌーヴォーの影響下にあり、名所図絵としては構図的に稚拙（ちせつ）です。彼は鍬形蕙斎（くわがたけいさい）や葛飾北斎など江戸期の浮世絵作品を研究し、大胆な構図や浮世絵的技法を吸収して独自の「初三郎式」と呼ばれる作品を生み出しました。同時に、当時飛躍的な進化を遂げていた最新の印刷技術にあわせて、自身の作風を進歩させて作品を「印刷芸術」と呼びました。

大正から昭和初期にかけての初三郎作品の多くは、石版印刷（リトグラフ）で印刷されたものです。多色刷りで浮世絵的な木版画表現を試みるも、当時の石版印刷ではボカシなど細部の再現は、技術的にとても困難でした。

▲吉田初三郎「大正広重物語」
大正13年（1924）益田啓一郎氏 所蔵
吉田初三郎の自伝。自身の画歴に加えて作品の制作工程も漫画的風刺画で解説しています。

転機は今から百年前、大正十二年（一九二三）に起きた関東大震災です。東京の印刷会社の多くは被災し、最新のオフセット印刷機の導入が全国的に進みました。初三郎作品もオフセット印刷へ移行しましたが、一九二〇年代後半にかけて十版以上の多色刷りによる大胆な構図で力強い仕上がりの良作を多数生み出しました。

一九三〇年代になるとオフセット印刷とカラー写真製版の進化によって、絹本（けんぽん）肉筆画本来のボカシや風合いを印刷で表現することが可能になります。ただ、その頃には全国の都市拡大などを受けて、依頼される鳥瞰図も街並みを広範囲に描くものが主流となり、大胆なデフォルメや構図の作品は生まれにくくなりました。さらに、戦争へと向かう中で彼の描く「印刷芸術」作品の多くはスパイ行為にあたるとして禁止されます。戦争で多くの優秀な弟子と印刷技師を失った初三郎の「印刷芸術」作品は、全盛期の輝きを取り戻すことはありませんでした。

▲吉田初三郎「Beautiful Japan（美の国日本）」昭和5年（1930）益田啓一郎氏 所蔵
鉄道省国際観光局・ジャパンツーリストビューローによって発行された絵葉書・ポスター。日本の観光宣伝のために制作され海外で一万部配布されました。「フジヤマ・サクラ・ゲイシャガール」の観光イメージの基となった吉田初三郎作品の中で最も有名なものです。友禅図案師見習いから画業を出発し洋画を学んだ初三郎らしい作品です。

▶吉田初三郎「安政元年の横濱村（横浜御絵はがき）」昭和10年（1935）益田啓一郎氏 所蔵
一千種以上がある絵葉書作品には、浮世絵的な構図も多く見られます。